

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22530511

研究課題名(和文)「家族」となることの実践：乳幼児の家族相互行為参加の組織

研究課題名(英文)Practices for "becoming a family member": Organization of young children's participation in family interaction

研究代表者

高木 智世 (TAKAGI, Tomoyo)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：00361296

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、言語発達過程にある子どもが、どのようにして、相互行為場面における多様な資源を利用しながら家族相互行為へ参加しているのかを実証的に明らかにすることを目的とした。特に、以下のことを焦点として、会話分析の手法を用いて子どもと養育者の実際の相互行為場面を分析した。1) まだ言葉を発しない乳児は、どのような仕方での他の家族のメンバーとの相互行為に「参加」しているのだろうか。2) 言葉を用い始めた幼児は、養育者とのやり取りにおいてどのように相互理解を確立しているのだろうか。研究の成果として、それぞれの間に対して、参加者が用いる具体的なプラクティスのいくつかを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study is aimed at empirically revealing how preverbal children and young children participate in interactions with other family members even with limited linguistic resources. In particular, the following research questions are pursued through the conversation analytic approach: 1) how preverbal infants "participate" in multi-party family interaction, 2) how children who started to talk build and maintain inter-subjectivity while they are interacting with their caregivers. Through detailed analysis of multimodal ways in which these family interactions are organized, some practices are found to be employed by participants in order to make it possible for the young children to actively participate in family interaction.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学、社会学

キーワード：会話分析 乳幼児 家族相互行為 マルチモダリティ 間主観性 参加の枠組み

1. 研究開始当初の背景

子どものコミュニケーション能力の発達の研究において、生まれてから2~3年という限られた期間における劇的な変化を縦断的にとらえようとする試みは、発達心理学の領域を中心として数多くあるが、その「変化」をとらえる以前に、その時期の子どもが他者と相互行為を行っている場面において何が起きているのか、このことを、日常的な相互行為場面を丹念に分析し、可能な限り厳密に、かつ、包括的にとらえようとする研究は少ない。本研究では、まずは、乳幼児が日常的相互行為に参加することがいかにして可能となっているのかを明らかにしていく経験的研究の重要性を踏まえて、乳幼児が参加する日常的相互行為の大部分を占めるとされる家族との相互行為場面を対象とし、次の3点を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の目的

(1) 相互行為への参加が、言語獲得に先立つという事実は、乳幼児と養育者の相互行為におけるマルチモダリティを厳密にかつ体系的に解明することの重要性を示している。マルチモーダル(質の異なる多様)な資源が、どのように参照・利用され、どのように絡み合って「いま、ここ」における乳幼児と養育者の相互行為の成立を支えているのかという問題について、本研究では、相互行為の参加者の(視線やジェスチャーを含む)身体の動きや配置に着目し、乳幼児の相互行為参加を可能にする身体の組織を明らかにする。

(2) 言語獲得過程にある乳幼児でも養育者との相互行為が可能となっているのは、成人(養育者)同士の相互行為を組織する様々な相互行為の(通常は言語的資源によって構成される)「仕掛け」が、乳幼児の相互行為への参加を可能にするべく、多様な仕方で行われているからである。会話分析の手法を用いて、乳幼児を参加者に含む相互行為におい

てそのような「仕掛け」がどのように用いられているか、また、乳幼児相互行為参加を可能にするために特別に用いられるような「仕掛け」があるのか、という問題に取り組む。(3) (1)と(2)における分析を踏まえて、乳幼児の相互行為への参加を可能にする相互行為や身体の組織が家族役割や社会文化規範の実践にどのように関わっているかという問題に取り組む。乳幼児の相互行為への参加は、相互行為の当事者にとっては、家族とともに日常を生きることそのものとして実現されていることを忘れてはならない。「家族」の相互行為への参加を通して、いかにして、「『家族』であること」をすることや、成員の新参者(乳児)に対して「母」「父」「きょうだい」として振舞うことが達成されているのかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、相互行為場面における多様な資源がどのように子どもの家族相互行為への参加を可能にしているのかを実証的にとらえるために、子どもと養育者の実際の相互行為場面を録音・録画によって記録し、音声・視覚情報を精密に転記したトランスクリプトを作成した上で、会話分析の手法によって厳密な事例分析を積み重ねた。会話分析は、相互行為場面の厳密な記述を通して人間が相互行為を通していかにして社会秩序を生み出しているかを明らかにする手法・学問領域である。会話分析の枠組みを用いることによって、日常的な言葉のやりとりを社会の成員による実践としてとらえ、実践としての行為は、他者による理解可能性を志向して様々な水準で極めて微細なレベルまで秩序立っていること、また、それを可能にしている人間の相互行為能力の実際を説得的に示すことができる。

4. 研究成果

実際のデータ分析を進めるにつれて、上記の(1)と(2)の目的は、別々の現象として捉えられるわけではなく、乳幼児の相互行為の参加を可能にするプラクティスが常にマルチモーダルに構成されていることが確認できたため、具体的なりサーチ・クエスチョンを以下のように設定した。1) 乳幼児のいる家族の相互行為場面において、まだ言葉を発しない乳児は、どのような仕方家族相互行為に「参加」しているのだろうか。2) 言葉を用いた始めた乳児は、養育者とのやり取りに置いてどのように相互理解を確立しているのだろうか。

研究の成果として、それぞれの問に対して、以下のような事が明らかになった。

(1) 乳児は、しばしば、他の家族のメンバーに代弁される。乳児を代弁する場面では、乳児を十全な参加者として相互行為の中に組み込む手だてが用いられており、乳児は、家族のメンバーとなった当初から複雑な相互行為秩序の中に取り込まれている。また、そのような乳児の代弁を乳児の兄・姉が行う事もあり、幼児である兄・姉は、未だ言語発達過程にありながら、複雑かつ流動的な参加枠組みの中で相互行為に参加する経験をしている。

乳児を代弁する場合、多くの場合、その乳児の目前で、ある発話内容が「～て」などの引用の形式で標示され、その時、その場で、その乳児が発話したものとして別の参加者に向けて提示される。

養育者が乳児を代弁する場合は、上の子ども乳児に対する振る舞いについて何らかの変更を促す要請をしていることが多い。例えば、次の事例では、床の上に座っている父親(F)に寄り添っている姉(S; 4歳1カ月)と弟(B; 1歳2カ月)のやりとりが発端となっている。姉が弟に写真を見せている。弟はその写真をつかみ取ろうとするが、姉は写真を握ったまま立ち上がり、弟(と父親)に

背を向けてしまう。弟の方はつかもうとしていた写真が持ち去られ、泣き出す(01行目)。

[1] [f-081229_mitaitte]

01 B: う::う:: (泣き声)

02 F: ゆうちゃんちゃんとみたいっ[て。

03 S: [ぱっ

04 [ぱっぱ(歌い始める))

05 F: [はい

06 B: ぱんだっじゃぱ:: (歌いながら写真をFに渡す))

02行目の父親の発言は乳児の発話の「引用」として定式化されている。05行目で、父親が、Sが握っている写真に手を伸ばして触れながら「はい」と促すと同時にSは写真を手放し、父親がその写真をBに渡すのを(身体的に)受諾している。このように、乳児の「引用」が、乳児の欲求を「代弁」するものとして提示されている限りにおいて、それは、乳児の欲求を満たすように「要請」する行為として理解され、次の順番において、その行為が向けられた兄/姉が、その欲求に応じる行為を行うことが適切となる。

一方、兄/姉が乳児を代弁する場合の多くは、養育者が乳児に宛てた発話に対して、(当然ながら)言語的に反応を返すことのない乳児に代わってその発話に対する反応を産出し、親に向けて報告する、というものである。

[2] [t_080628_1_1179_nerutte]

01 M: ケンスケどうする: ? 寝るか遊ぶか

02 どっちする:: ? ((Bに向けて))

03 B: n [n

04 M: [お姉ちゃんと遊ぶ:: ?

05 (1.0)

06 S: ね:寝る::ってゆってる。

07 M: 寝る::ってhhゆうてhるh?うそ::、

08 遊びたいってるわおねえちゃと::

母親(M)は、01~04 行目を発話する間、胸元に抱いている乳児のケンスケ(B; 11 か月)を見ている。つまり、この発話を乳児に向けて産出する。しかし、04 行目の発話を完結した直後、母親は姉(S; 2 歳 11 か月)の方に顔を向ける。姉は、母親の 01~02 行目の発言の途中で母親と B の方向に視線を向け始め、この時点では二人の方向に視線を固定している。S は、約 1 秒の間合いの後、05 行目を発しながらより先鋭的に母親と視線を合わせようにかすかに上方に顔を動かす。S の発話の「引用」部分は、養育者が乳児に宛てた「質問」において選択肢の一つとして挙げられている「寝る」を取り上げることによって、この養育者の「質問」に対する「応答」として定式化されていることに注目したい。養育者が乳児を代弁する場合と同様、ここでも隣接ペアを基盤として、養育者・乳児・乳児の兄/姉の三者の参与枠組みが組織されているのである。

このように、乳児の代弁のプラクティスは、しばしば、[質問]-[応答]など、対として実現されることが一般的期待として認識されるような「隣接ペア」を軸として組織されていることが明らかになった。隣接ペアが行為連鎖を構築する際の基本的な単位であるとするれば (Schegloff, 2007)、まだ言葉を発しない乳児は、このような仕方でもかなり早い時期から相互行為の秩序の中に組み込まれ、(間接的ではあっても)相手の行為に応接する行為を産出するという相互行為の原理を繰り返し経験しているのである。また、同様に、兄・姉である 2~3 歳の幼児も、隣接ペアを軸とすることによって複雑な参与枠組みの中で相互行為に参加することが可能となり、その中で、相手の行為に応接する行為を生み出すことに関わる以下のような様々な問題に取り組む必要性に迫られる。

・どのような行為が適切に「応接」するのか；
そもそも相手(養育者)の発話はどのような

行為とみなすべきか

・どのような資格で相手の発話に応接する発話を産出しているのか(発話が宛てられた受け手としてなのか、受け手ではないが、代わりに応えられる者としてなのか、etc.)

・上記の点についての自身の理解はどのように自身の振る舞いの中に組み込む事が可能か。

以上のように、乳児の家族相互行為への参加を可能にする手だての一つである代弁のプラクティスは、子どもの言語使用と相互行為能力の発達を促すような契機に満ちた相互行為のモメントを生み出しているのである。

(2)

言葉を使い始めた幼児は、しばしば、自身の発話に対して養育者から即座に適切な反応を得られないという経験をする。事例研究を通して、そのような場合、幼児は、単に先の自分の発話を繰り返すだけではなく、言語的・身体的・環境的資源を複合的に利用して、どのような反応を求めているのかを受け手により先鋭的に伝えることができることを明らかにした。

事例研究で取り上げた 2 歳児は、自分の言語的ふるまいに対する相手のふるまいを見ることによって、相手が先の自分の言語的ふるまいを適切に解釈していないことを理解し、その問題を解決すべく自分の先の発話をやり直すことができた。また、別の事例の幼児については、加えて、自分が相手の発話を適切に理解していない可能性に志向し、自らの理解の適切さを確認しつつ相互行為を展開していた。

ここに見られる幼児の能力は、他者とことばを取り交わす中で生じる間主観性の揺れを敏感に捉え、対処する能力だと言える。言い換えれば、他者が「考えていること」の理解、すなわち、他者の心の理解が、やりとり

の実践の中で達成されたものとして捉えることができる。日常的相互行為における「心の理解」は、自分と自分に向けられた相手のふるまいの間の即応的連関を通して、その都度実践され、その都度（相手と自分のふるまいが相互に反応・応接しながら相互行為が進展していく過程を通して）確認・更新され、そしてそのすべては手続き的知識の実践として公然の相互行為の中に埋め込まれているのである。本研究は、他者の心の理解という社会的能力を対象とする従来の「心の理論」研究に対しても一定の示唆を与えうるものと思われる。

家族の相互行為場面において、養育者が他のことに注意を向けている中で、その場に存在する別の事物に養育者の注意を向ける方法として、子どもは、しばしば、「これ」などの指示詞を含んだ発話を養育者に向ける。そして、その発話に反応して養育者が子どもの方に視線を向け、再度、指示対象を特定する事を求めた後に、身体的・言語的資源を用いて養育者の視線をその指示対象に誘導する。このような指示詞の用い方は、必ずしも言語発達過程にある子どもに限定されているわけではないかもしれない。しかし、2～3歳児がこのように指示詞を用いているということは、指示詞の（現場指示的）使用が相互行為的にどのような働きをするのか（自分が現場にある事物を指し示していることを伝えるというだけでなく、受け手に共同注意を要請する働きがあるということ）、またその働きが適切に成し遂げられるためにどのように自分のふるまいを組織しなければならないのか、ということ早期に理解していることを示している。このような観察が、

で見いだされた事とどのように関連し、子どもと養育者の相互行為についての理解にどのような示唆をもたらさうかは、現在、検討を進めているところである。また、当初挙げていた3つ目の目的（3）についても、

更なる分析を蓄積した上で、理論的な枠組みを精査する事も含めて鋭意取り組み、一定の成果を出したいと考えている。

なお、本研究を進めるにあたっては、平成 19-23 年度文部科学省科学研究費補助金・若手研究(S)「養育者-子ども間相互行為における責任の文化的形成」（課題番号：19672002、研究代表者：高田明氏）によって収集されたデータも使用した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

高木智世、「幼児と養育者の相互行為における間主観性の整序作業-修復連鎖にみる発話・身体・道具の重層的組織-」(『社会言語科学』第14巻1号)pp.110-125、2011年9月(査読有)

〔学会発表〕(計 7 件)

Takagi, Tomoyo. Fork WA Fork?: Children's requests for activity-relevant items. (Paper presented at Workshop on Japanese Language and Interaction), シンガポール国立大学, 2013年9月6日。

高木智世、「相互行為の中の引用標識：家族相互行為における「代弁」のマルチモーダル分析」(話し言葉の言語学第2回ワークショップ)、東京大学、2011年8月30日。

・その他、8回にわたって、『こどもの相互行為分析研究会』(公開)を開催し、データセッションや研究発表を行った。

〔図書〕(計 1 件)

高木智世、「第24章 エスノメソドロジー(社会学)の考え方」(日本発達心理学会編・田島信元・南徹弘編著『発達科学ハンドブック1：発達心理学と隣接領域の理論・方法論』、新曜社、pp.298-306、2013年

〔その他〕

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/takagitomoyo/home/kodomo-no-sougo-koui-kenkyuu-kai-no-oshirase>

6. 研究組織

(1)研究代表者

高木 智世 (TAKAGI, Tomoyo)
筑波大学 人文社会系・准教授
研究者番号：00361296